

国分高校通信 < 第20号 >

平成26年度版

平成26年12月25日(木)

鹿児島県立 国分高等学校

霧島市国分中央2丁目8番1号

TEL 0995-46-0001

桜蔭塾

12月24日(水) 終業式の日、

全校生徒を対象に本校体育館で桜

蔭塾を行いました。桜蔭塾は、本校の同窓会の方をお招きして、在校生に向けて講話をしていただくもので、毎年実施しています。

今年は、霧島市商工会会長の中村博美氏(「中村タクシー」代表取締役社長)に、「経験・体験は一生の財産!!」という演題で、60分間の講演をしていただきました。

「生徒の皆さんと時代が違う話だけれど」と前置きをしつつ、小学生時代⇒中学時代⇒高校時代⇒大学時代⇒東京での就職⇒帰郷しての家業後継⇒現在に至るまでを、数々の経験に基づいてお話ししてくださいました。熱のこもったお話は、後輩たちへの思いやりにあふれたメッセージでいっぱいでした。

「自分の人生は他人が決めるのではない。自分の人生はしっかりぶれないように見据えてください! 信じてやっつけば必ず達成できる!!」といった激励や、大学卒業後、就職した際に先輩から「遅刻は絶対にするな」と教育を受けたことから、自分でも時間に厳しく、「早くから来て待っている人の事を考えれば、会議の開始時刻はしっかり守らないといけない。」と時間を守ことの大切さや、「進学で、仮に第一志望のところへ行けなくても終わりではない。たとえ第二志望のところでも、そこでどのように過ごすかが大切だ。一生懸命やれば、第一志望を越えることができる。」と努力することの大切さをお話しされました。また、約25年務めた鹿児島神宮の「初午祭」実行委員長としての立場から、皆さんも40歳になったら同級生と踊って地域の伝統をつないでほしいといったお話もされました。

生徒を代表して生徒会長が、『信念を持つこと・時間を守ること・友人を思うこと』の大切さをしっかり学びました。とお礼の言葉を述べました。



2学期 終業式 (12月24日(水))

～校長式辞(抜粋)～

去る12月10日と12月16日のそれぞれの出来事について少し話をします。

12月10日、その日、ノーベル平和賞を受賞したパキスタンの17歳のマララ・ユスフザイさんは、「子どもの教育を受ける権利」について訴え、彼女は、「Why is it that giving guns is so easy, but giving books is so hard? Why is it that making tanks is so easy, but building schools is so difficult?」と語りました。

12月16日は、パキスタンのペンシャワールでパキスタン・タリバン運動のテロリストが学校を襲撃し132人の生徒と16人の職員の命が奪われました。パキスタンは民族問題や宗教問題に様々な利権が複雑に絡み合い、混沌とした所です。しかし、かといって、このような悲惨な事件が起こって良いわけはありません。では、なぜこのような事件が起こるのか? 色々な見方ができると思います。私は「生命の尊厳」とか「平和の大切さ」とか「対話による解決」とかいった、尊重されるべき共通の価値・言語がその地域で共有されていないからではないかと考えたりもします。だからこそ、マララさんは「平等、正義、平和」といった「尊重されるべき共通の価値や言語」を子どもの時から学ぶ必要があると考え、本と学校の大切さを訴えているのだと思います。

翻って、我々は、今のところ、有難いことに、「Giving books is so easy, but giving guns is so hard. Building schools is so easy, but making tanks is so difficult.」といった環境を享受しています。国分高校は、学校施設に今年度は約2千万円が県財政から投下され、図書館には約2万5千冊の蔵書が保有されています。

諸君には、国分高校でこれまでの先達が積み上げてきた知的財産を大切に想い、学び、「共通の価値や言語」を習得して欲しいと考えます。そして、我々の周りに横たわる様々な課題や世の中の不条理に向き合い、その解決を目指す人になって欲しいと期待します。

最後になりますが、昨日12月23日は鹿児島空港でクリスマスコンサートがありました。本校の音楽部の温かな演奏で、2、3歳の子供が無心に、また、年離れた御夫婦はにこやかに手拍子を取っておられました。12月21日(日)の新聞には、演劇部とダンス部の演技やコメントが紹介されていました。6月には校門前で自転車で倒れたご老人の救護に、つい先日は交通事故に遭われた方の救護に当たった本校生がいました。

4月以降、様々な場面で国分高校生の活躍を知ることが出来ました。誇らしい思いで、平成26年を閉じられることを君たちに感謝して、式辞とします。

